

モチーフと構成

埼玉 遠山 厚史

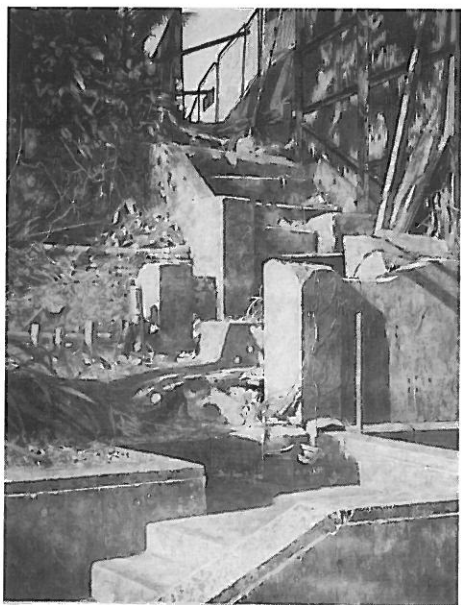
十数年ほど前まで、私は主に遺構など、長い年月風雨に晒されてきたものを画題に制作していました。その頃勤めていた都立日高校に、昭和初期に建てられた講堂や塀が残されていたという偶然の出会いもありましたが、遺構のもつ独特な雰囲気やなんとか表現したいという事が、制作の主な動因でした。当時の私にとって、モチーフは何を描くかというその「対象」に重点が置かれていました。

同じ頃、私には制作上の小さな転機もありました。一つは色彩のこと、もう一つは画面構成のことです。

個展に來場下さった、ある色彩学の先生から「プリズマカラー」という色鉛筆を勧められました。プリズマカラーというのは灰味のトーンが豊富なセットです。私の色使いには、固有色をないがしろにして、やたら高彩度のものを載せたがる傾向がありました。松本重雄先生から「葉っぱは緑！」と一喝して頂いたのもこの頃です。色鉛筆でエスキースを取ることを始めてから、波乱含みの色彩は、少しずつ整頓されて来たような気がします。

二つめは、美術教師という職業柄、美大への実技指導があり、その一助とするためにデザイン系の理論書を読んでいたことです。その中で、小林重順著「造形構成の心理」は、構図を考える際の、様々なヒントに満ちていました。モチーフ

講堂・冬



▲ 朽ちた階

フというものを、描く対象に重心を置くあまり、一種の隘路に入り込もうとしていた私に、別の方向性を提示してくれる本でした。

この頃から、モチーフとしてよく階段を描くようになりました。日高校の遺構には崩れかけた古い階段があったので、見上げと俯瞰の構図を描きました。その後、B高校に異動。B高校はH高校に比べて歴史が浅く、校内にはほとんど古いものはありません。私にはまだ、遺構へのこだわりがあったのです。B高校はモダンな建物であり、切り取れば構成的には面白いのですが、どうにも味気ない。そんな時、廊下から生徒たちの声が聞こえてきました。

演劇部員がデモンストレーションを兼ねて、教室外で「読み合わせ」を始めたのです。校内の情景に人物を配したらと

◀ 冬の日



いう着想が浮かんだのはこの時でした。
「明暗の移ろいととも様々に変幻する
構成のおもしろさ。階段や建物内部の情
景は、私にとって様々な可能性を与えて
くれるモチーフです。」

かつてセザンヌは「りんごは口実でし
かない」と語ったそうです。確かにモチ
ーフは口実、作品のはじまりに過ぎませ
ん。ですが、きっかけがなければ制作は
始まらないというのも事実です。

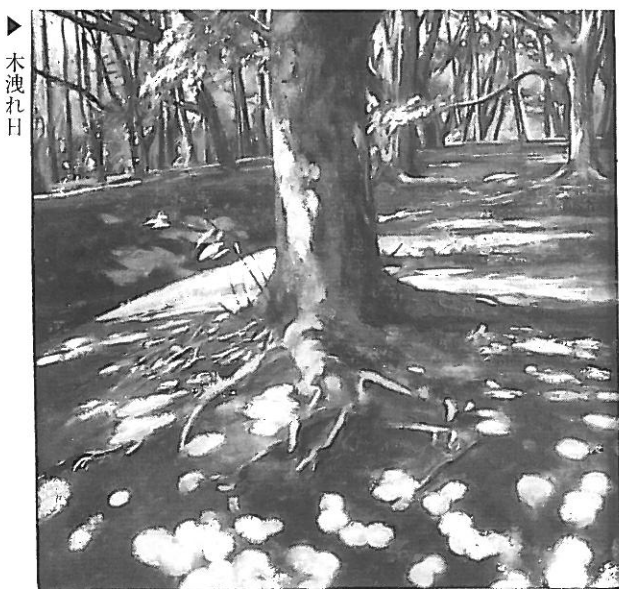
私は、これからも、モチーフとの未知
数の出会いを求めて制作を続けていきたく
と思います。



▶ ポリフォニー



▲ 読み合わせ



▶ 木洩れ日



▶ 朝の階